

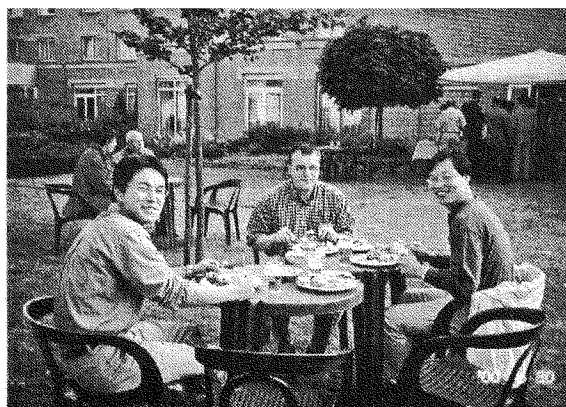
## “Third International Congress on Adventitious Root Formation” に参加して

犬飼 義明

名古屋大学大学院生命農学研究科

2000年6月27日～7月1日に、オランダのフェルトフォーフエンにおいて「第3回不定根形成に関する国際会議」が開催された。会場のコニングスホフ会議センターへは首都アムステルダム近郊のスキポール空港から電車と Train Taxi（同じ方面へ行きたい人たちが適当に集まって同じ車に乗り合わせる）という慣れない乗り物に揺られ、乗り間違えなどを経験しながら約3時間かけてようやく辿り着いた。会議へはヨーロッパを中心に26カ国からの人々が集まったが、参加者数は107名とそれほど多くなく、講演会場は一つのみであった。また、Congress Dinner では会議場の中庭で仲良くバーベキューを楽しむなど、手作り感覚の国際会議であった。ちょうど会議の開催期間中に、サッカーのヨーロッパNo.1を決める“Euro 2000”の準決勝がオランダで行われていたこともあり、会議の参加者が各チームのキャップをかぶって大騒ぎしながらディナーを楽しむ風景が見られるなど、終始和やかな雰囲気での会議は進行していった。

会議は Plant growth regulators, Applied aspects, Molecular biology, Lateral roots and root architecture, そして Competence to root の5つのセッションに別れて進行し、口頭43題、ポスター31題の発表があった。5つに別れてはいたものの、各セッション毎に独立したテーマに基づいて講演が配備されていた



と言うよりは、細胞の脱分化、分裂、分化といった不定根形成の諸過程において、オーキシンをはじめとする植物ホルモンの移動や分布、内生レベルがどのように調節され、またどのような機能を持つ遺伝子が発現するのかといった課題に関する講演が全体を通して見られ、それらが講演数の大半を占めていた。さらに“不定根”というキーワードが会議のタイトルには使われているが、上記したように“側根”の形成機構に関するセッションも用意されており、この部門においてもシロイヌナズナをモデル植物として用いた遺伝、生理および分子生物学といった分野での目覚ましい進展を目の当たりに感じることができた。私自身の研究課題もイネの節根の遺伝的制御機構の解明を目指す基礎的分野の研究であり、その点では今後の研究の方向性等に関して大変参考になり有意義であった。

私は応用分野での研究にも大変興味を持って参加したが、残念ながら“Applied aspects”での講演数は7題にとどまっていた。ちなみにこのセッションでは、挿し木の不定根形成を促す方法として、不定根を誘導する能力を持つ菌類との共生系の利用や、肥培あるいは温度管理により挿し木の生理的状态をコントロールし、発根を促すといった栽培技術の改善を目指した研究が報告された。また、不定根形成を促進する働きを持つ遺伝子をバラの台木へ導入し、穂木の生育を促進させようとする試み等も報告されたが、“分子レベルでの不定根形成機構の解明”とその“実践面への応用”の間にはまだまだ大きな隔りがあると実感した。つたない英語ではあったが、この両者間を取り持つような研究の必要性を強く主張する研究者とも交流を持てたことは、今回の会議参加において貴重な体験であった。

なお、オランダ滞在中にエクスカージョン等を通して研究施設を案内して頂くことができましたので、その内容については東京大学の森田先生と連名で原稿を書き、「農業および園芸」へ掲載する予定でいます。